

2025年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	清田 政秋
研究テーマ	本居宣長の漢意 ^{からごころ} 批判と仏教思想—言語論の視点から—
研究概要	本居宣長の漢意批判は、漢籍の思考方法の批判であるとともに、思考と一体化した言葉の使い方に対する批判である。先行研究は前者の問題が中心であったが、本研究は後者を主体にし、漢意批判はいつ頃からどう始まったのか、それは仏教思想に関連し、さらに宣長の言語論に基づくのではないかという視点から漢意批判の特質を検討する。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>当初の研究題目を設定し直し、宣長は仏教の哲学的思考をどう応用して〈物のあはれ〉の説と漢意批判を展開したかを検討し、その中から仏教の影響を超える宣長独自の哲学的思考を明らかにすることを研究題目とした。宣長は仏教から心と対象世界は切り離せないとする哲学的思考を学び、それを〈物のあはれ〉の説に応用した。〈物のあはれ〉を知るとは感じることを通した対象の捉え方であるとし、普通の目でありのままに見ることを対象把握の基本に置いた。その延長線上で対象世界を目に見えない抽象的な理で把握する漢意を批判した。</p> <p>さらに『古事記伝』で宣長は、古伝説の实在を否定する漢意を批判し、天上に高天原がある等の上代の霊異な事は、人々が見聞きしたものであることを明らかにした。それは仏教思想に基づきそれを超えて宣長が構想した、「世界をどう捉えるか」は心の有り様の現れであるとする独自の哲学的思考に基づく。上代の人々の心の有り様について深く思索した宣長は、上代人の持つ世界の捉え方の下で、古伝説の世界は目に見え、耳に聞えるままの世界であったと捉えたのである。しかし研究史では、上代には後世と異なる考え方があったとする宣長の着想は看過された。従来宣長の学問は、その実証性が高く評価される一方で、古伝説にある霊異な事の実在を信じる古伝説崇拝者として誤解されて来た。今年度の研究は宣長の独自の哲学的思考を明らかにしようとした。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>〔発表〕</p> <p>研究発表:単「〈物のあはれ〉の説と漢意批判—物事に触れる経験をめぐる本居宣長における仏教の哲学的思考—」佛教大学大学院中間発表会（仏教文化部会）（2025年7月12日、佛教大学）</p>
3. 今後の課題	<p>宣長は京都で医学を学び松坂で生涯開業医をした。医者をしつつ多方面に亘る膨大な著作を著した。最終的にその学問は『古事記伝』に収斂した。収斂化は深化を伴い、その学問は、神とは何か、天皇とはどのような存在かを問い、上代の「道」を探求する奥深い道の学問となった。宣長は京都でどのような医学を学び、医学・医業をどう認識したのか。宣長において医学・医業と学問はどう関連するのか。その解明が今後の課題である。</p>